

Title	地域の居場所からのコミュニティづくり： 芝の家の「中間的」で「小さい」グループ生成を事例に
Sub Title	Roles of regional common place in community formation : a case study of small community activities at "Shiba no ie"
Author	坂倉, 杏介(Sakakura, Kyosuke)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2010
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 社会科学 (The Hiyoshi review of the social sciences). No.21 (2010.) ,p.63- 78
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10425830-20110331-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

地域の居場所からのコミュニティづくり

——芝の家の「中間的」で「小さい」グループ生成を事例に——

坂 倉 杏 介

1. 共助社会と地域の居場所

2030年、75歳以上の総人口における割合は、2007年の9.9%から19.7%に倍増し、65歳以上では21.5%から31.9%に上昇すると予測される¹⁾。また19歳以下の人口は18.4%から13.5%に下がり、少子化傾向も継続見込みである。10人に3人以上が高齢者、その内2人が75歳以上という本格的な少子高齢化社会に向けて、これまでのような公的サービスに依存した福祉政策や、行政主導の地域づくりのあり方は、抜本的な見直しを迫られると考えられる。

こうしたなか期待されるのが、「共助型の地域コミュニティ」である。共助型の地域コミュニティとは、公的サービスや自助努力だけに頼るのではなく、日常生活の不自由を住民同士で助け合い、安心感のある暮らしを実現するという考え方である²⁾。近年ではソーシャル・キャピタル（社会関係資本）という視点から、住民同士の「ネットワーク」、「社会的信頼」、「互酬性の規範」を高めることが、地域社会での助け合いや課題解決力の向上につながると指摘されており³⁾、政策レベルにおいても住民同士の関係性の力が注目されている。

歴史的にみると、日本社会には本来、入会や結など公私の中間領域に成立する互助

1) 国立社会保障・人口問題研究所「総人口、年齢4区分（0～19歳、20～64歳、65～74歳、75歳以上）別人口及び年齢構造係数：出生中位（死亡中位）推計」（『日本の将来推計人口（平成18年12月推計）』）、<http://www.ipss.go.jp/pp-newest/j/newest03/syousai03.asp>（閲覧日：2010年12月10日）。

2) 恩田守雄「共助の地域づくり—『公共社会学』の視点—」学文社、2008年、24～25頁。

3) 内閣府「コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書」、内閣府経済社会総合研究所、2005年。

システムが多様な形で存在していた。しかしそれは、戦後から高度成長期を経て、一方で行政による垂直的な管理の進行と公的サービスの拡充、他方では個人の利益追求や核家族化によって両極化し、希薄になっているのが現状だ⁴⁾。久田邦明によれば、学校教育や青少年教育は本来、地域の支え合いの力を前提に制度化されていたのだが、高度成長期以降、地域の力が低下するに従って様々な問題が生じるようになったという⁵⁾。敷衍すれば、町内会、社会福祉協議会、民生委員といった地域組織が以前ほど十全に機能しなくなった背景にも、同様の構図がみとれる。

したがって重要なのは、公的サービスを提供する制度や施設の整備、NPOなどの地域組織の支援に先立ち、それらを支える地域住民同士のきめ細やかなつながりを、今後どのような道筋で（再）形成していくか、という点に他ならない。こうしたコミュニティ像について、都市のコミュニティ形成論では、これまでは主に伝統的な地域共同体と近代的な社会構造の影響関係のなかで論じられてきた。すなわち、「ゲマインシャフト／ゲゼルシャフト」（テンニース）、「コミュニティ／アソシエーション」（マッキーバー）、「選択できない縁／選択できる縁」（上野千鶴子）といった二元論に図式化され、どちらかといえば前者から後者への発展過程として扱われてきたといえる。だが、高齢人口の増加はもとより、都市や郊外において地域コミュニティの機能を肩代わりしてきた「会社コミュニティ」の崩壊による個人の社会的孤立⁶⁾といった現状を鑑みると、単純に「地縁から知縁へ」⁷⁾という移行ばかりが有効とは限らないと思われる。アソシエーション的ネットワークの有用性を活かしながらも、特定の地域を縁にし、既存の地縁組織と連携を保ちつつ、しかしムラ社会的な旧来の地縁・血縁への回帰ではなく、さらに多文化共生的で「伸縮自在な縁」⁸⁾の集積としての地域コミュニティが求められているのではないだろうか。

こうした縁を取り結ぶ仕組みのひとつとして、近年、地域の茶の間、コミュニティカフェ、子育てサロンといった、「誰でも気軽に出入りでき、その場に集う人と自由に交流できる」地域コミュニティの交流空間が注目されている（本論では「地域の居場

4) 田中重好『共同性の地域社会学』、ハーベスト社、2007年。

5) 久田邦明『生涯学習論——大人のための教育入門』、現代書館、2010年。

6) 広井良典『コミュニティを問いなおす——つながり・都市・日本社会の未来』、筑摩書房、2009年。

7) 望月照彦『マチノロジー——街の文化学』、創世記、1977年。

8) 吉原直樹『都市とモダニティの理論』、東京大学出版会、2002年。

所」と総称する)⁹⁾。地域の居場所の有効性は各所で指摘されているものの、しかし、こうした空間からどのように新たな地域コミュニティが立ち上がるかという点については、十分に定式化されていない。

本論では、筆者らが取り組む地域の居場所「芝の家」を取り上げ、そこで生まれている「中間的」で「小さい」グループの生成過程に注目する。芝の家では、開設後2年を経て、学生、地域住民、近隣会社員など多様な主体がグループを形成し、環境、医療、ソーシャルメディア、子育て支援など様々なテーマの活動を開始している。これらは、行政からの要請ではなく、また私的利益の追求でもないという点で「中間的」活動であり、また、NPOのような組織ではない「小さい」活動だが、旧来の地縁組織とのゆるやかな連携を保ちつつ、地域外の参加者の関心や知識を活かして発展している。このような活動が網の目のように広がることこそ、現代の都市部における地域コミュニティの（再）形成の一つのあり方なのではないだろうか。こうした視点から、自発的な活動が生じるために地域の居場所が果たす役割を考察し、共助型地域コミュニティの形成のための一つの方法論を示すのが本論の狙いである。

2. 芝の家の概要と現況

芝の家は、港区芝地区総合支所が実施する「昭和の地域力再発見事業」の拠点として、2008年10月、港区芝三丁目に開設された地域の居場所である（図1）。「昭和の地域力再発見事業」とは、従来型の施設整備などサービス提供型の地域施策を補完する、住民同士の助け合いや課題解決力の醸成を目的とする実験的な事業で、慶應義塾大学との共同で実施されている¹⁰⁾。

9) たとえば、さわやか福祉財団が推進する「ふれあいの居場所」、長寿社会文化協会による「コミュニティカフェ全国連絡会」など。内閣府の発行する『平成22年版高齢社会白書』でも、人と人とのつながりを持てる機会づくりの一例として、「居場所」を紹介している。<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2010/zenbun/html/s1-3-clm5.html>（閲覧日：2010年11月5日）

10) 筆者は、企画段階から本事業に参画し、現在も芝の家の代表者として日々の運営に携わっている。



図1 芝の家の立地

芝の家は、かつては地域の目抜き通りのひとつであった通称「いろは通り」に面した角地、3階建ての住居の1階部分に立地する。道路に面した大きな開口部には縁側が設けられ、約50㎡の室内は、板張りのオープンスペースと作業場、給湯室とトイレからなる。駄菓子とセルフサービスのお茶コーナーのほか、板の間にはちゃぶ台や縁台、また近隣の住民から提供されたソファや電子ピアノなども置かれている（写真1、2）。



写真1 芝の家の外観



写真2 芝の家の内観

現在は、月曜日～土曜日までの週6日間オープンし、学生や卒業生、地域のボランティアの方々とともに運営している。6日間のうち月・火・木曜日の3日間は、お年寄りや地域の方々がゆっくりお茶を飲んで語り合える「コミュニティ喫茶」として、水・金・土曜日は近くに住む小学生を中心に自由に出入りできるオープンな「遊び場」として、近隣の様々な年齢の人々と賑わっている¹¹⁾。

また、月に数回、子ども向けのワークショップやお年寄りを対象とした講座、近くに住んでいる方が講師を務める「レコードコンサート」や「護身術講座」、「朗読会」といったイベント、大学主導のコミュニティづくりの勉強会なども行っている。

このほか、年に一度、芝の家開設を記念する周年イベントとして「いろはにほへつと芝まつり」を、近隣住民とともに実施している。会場は、通りに面した店舗や駐車場などを借用し、町内会や老人会、小・中学生やその親など60人ほどが企画、運営にあたる。通りは、様々な屋台やミニFMラジオ局などで賑わい、昔ながらの「おまつり」のようなイベントになっている。

2008年10月の開設以来、芝の家を訪れる人は着実に増加し、地域に根ざした居場所となっている。開設から2010年11月までの2年2ヶ月間の月別の来場者の推移は図2の通りである。総来訪者は、のべ17,710人で、開室一日あたりの平均の来訪者数は、32.9人。一ヶ月の来訪者数は、600～900人で推移し、2009年度の月ごとの平均は、約760人であった。12～1月の冬期休暇、8月の夏期休暇の時期は一時的に減少するが、

11) 詳細は芝の家ウェブサイトを参照。<http://www.shibanoie.net/>

半期ごとの来場者数の合計は、2008年10月～2009年3月が1,768人、4月～9月が4,511人、10月～2010年3月が4,602人、そして4月～9月が4,677人と、全体的には増加傾向にある。10月の来場者数が突出しているのは、前述の「いろはにほへっと芝まつり」の開催による。また、子ども、大人、高齢者（65歳以上）の属性別の内訳は、子ども：7,221人（41%）、大人：8,295人（47%）、高齢者：2,194人（12%）である。3区分のうち大人が増加傾向にあるが、これは、地域に定着するにつれて、高校生や会社員、近隣施設の職員などの来場や、見学や研修の件数が増えていることによる。

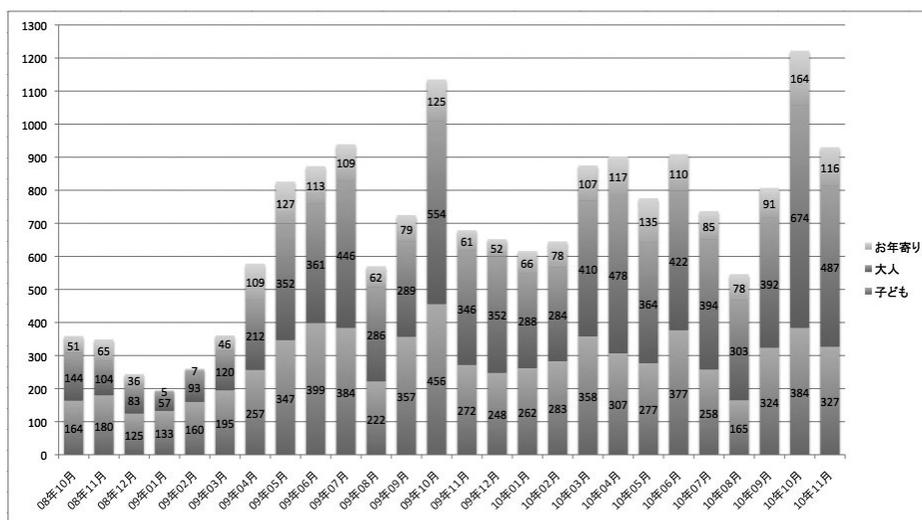


図2 芝の家の月別来場者数（子ども、大人、高齢者の3区分）

訪れる人の多様性だけではなく、来訪理由や過ごし方も多様である。例えば、低学年から高学年までの小学生が遊んだり宿題をしたりする。子どもだけではなく、その父母もおしゃべりやお茶を飲みに来る。乳幼児を連れてお母さんが、ゆっくりくつろぐ。大学生はもちろんのこと、中・高校生が訪れることもあれば、各国からの留学生も多い。20代から80代まで多様な年齢層の住民が散歩や買い物の途中に立ち寄り、昼時には近隣の会社員がお弁当を広げる。近隣のデイケアセンターに通うお年寄りや、保育園の子どもたちが団体で来ることもある。大部分が徒歩圏内の在住・在勤者だが、地域外からの出入りも多い。前述のように、見学や研修、取材や調査で訪れる人も多い。

3. 芝の家におけるコミュニケーションの特徴

様々な人の集まる芝の家だが、そこでの来場者同士のコミュニケーションの特徴として、様々な水準での開かれた関係が挙げられる。芝の家は、1) 地域社会の内部に対して開かれているのみならず、2) その外部へも開かれている。さらに、3) 福祉、医療、教育、環境といった生活の諸領域が縦割りに区切られるのではなく横断的に開かれている。しかも、4) そこに集う人々同士の関わり方はあらかじめ決められておらず、個人間の関係性についても開かれている。こうした特徴は、次節以降に述べる「中間的」で「小さい」グループ形成の前提であると考えられる。

- 1) 地域内への開かれ。来訪者の多くは徒歩圏内の住民であるが、町内会や老人会といった特定の組織の垣根を越えて集える場である。昔ながらの住民のほか、高層マンションに入居している新住民も多い。子どもから高齢者まで、在勤者や学生など、地域内で暮らし、働き、学ぶ、様々な立場の人に広く開かれている。
- 2) 地域外への開かれ。一方で芝の家は、地域の外部へも開かれている。在勤者や大学生、留学生や外国人は、伝統的な地縁コミュニティにとっては外部の人間であるが、それ以外にも芝の家には、見学や研修、打ち合わせや取材など様々な理由で地域外からの人が出入りしている。大学が運営していることから、コミュニティやアート、ケアや教育といった様々な分野の専門家が訪れることも多い。こうした人たちも、近隣の人々と同じように関わりあっている。また、ほぼ毎日、地域内外を問わず初めて訪れる人がおり、特定の顔見知りには閉じず、絶えず新しい人の出入りする環境になっている。
- 3) 専門分野間の開かれ。芝の家はまた、行政主導の事業にもかかわらず、行政組織の縦割り構造のなかの特定の領域に閉じられてはいない。子どもや高齢者の生活支援環境の創出が主な課題ではあるものの、その対象は広くコミュニティの課題全般に開かれている。それゆえ、子育て支援、地域教育、地域福祉、高齢者支援、まちづくり、多文化交流、団塊世代の支援、環境問題、国際交流といった様々な関心を持つ地域住民やNPO職員、行政担当者、研究者が、それぞれの関心から芝の家を訪れ、分野や組織を越えた関わり合いが生じている。
- 4) 関係性の開かれ。さらに、芝の家に集う人同士の関係性は、あらかじめ定められていない。関わりたければ関わるができるし、そうしたくない場合は関

わり強制されない。日本語の勉強をしていた留学生在が、気分転換に子どもと一緒に縄跳びをはじめ、やがてギターの演奏を披露する。おじいちゃんが子どもに絵を描いてあげることもあるし、スタッフの学生が小学生の家庭教師をはじめめることもある。しかし、それは偶然お互いのニーズがマッチしたということであって、何かしらの誘導が働いているわけではない。関係性が開かれていることで、それぞれの個人的動機にもとづいた自発性が働き、風通しのよい人間関係が生じている。

芝の家にはこのように、地域内外の様々な年齢、所属、関心、文化的背景を持つ人々が集う。そして彼ら／彼女らの関わり方は一人ひとりの自発性に委ねられている。重要なのは、場をともにする人同士が互いの違いを越えて存在を認めあう気持ちである。目的や価値観をあらかじめ共有した者同士が集うのでもなく、また他者を無視して自分のことだけに関心を払うのでもなく、多様な一人ひとりがひとつの地域という生活環境をともにしているという実感に基づいた関係が構築されているのである。

4. コミュニティの萌芽：「中間的」で「小さな」グループ形成

様々な形で開かれた関係から多様な主体間のつながりが生まれることで、それまで地域になかった新たなグループによる活動がはじまっている。こうした活動は、行政からの要請でもなく、また私的利益の追求でもないという点で公私の「中間」の活動であり、3名から10名ほどの「小さい」グループによって担われている。旧来の地縁組織内の活動ではないが、そうした組織とゆるやかな連携を保ち、地域に根ざしながらも地域外の参加者の関心や知識を活かして発展している。以下、代表的な事例を紹介する。

「コミュニティ菜園プロジェクト」

「コミュニティ菜園プロジェクト」は、近隣の子どもからお年寄りまで、一緒に花や野菜の鉢植えを育て、軒先にそれを設置していくという活動である¹²⁾。2009年夏、斎藤彩（文学部、スローフードクラブ所属、20代）¹³⁾と杉山光敬（北四国町会長、60代）

12) この取り組みは、文部科学省大学教育・学生支援推進事業大学教育推進プログラム 慶應義塾大学「身体知教育を通して行う教養言語力育成」事業の一環として実施されている。

13) ここでは、本人の了解を得て、実名で中心人物を紹介する。敬称略。以下同じ。

地域の居場所からのコミュニティづくり

を、渡辺久美（芝の家専従スタッフ、20代）が引き合わせたことがきっかけとなり、2010年度から本格的な取り組みが始まった。現在では、学生と地域住民が混在した20名以上のメンバーが集まり、鉢植えを設置する「里親」も20軒近くを数えるようになっている。植物の世話を通じて様々な年齢・所属の人々の交流機会になり、街路の環境緑化にもつながっている（写真3）。



写真3 「コミュニティ菜園プロジェクト」

「縁をつなげるすこやかプロジェクト『えんす〜ぶ』」

「えんす〜ぶ」は、「地域の健康づくり」をテーマに、若い医師や栄養士、医学生や薬学生たちによって進められる活動である。これまで「ハーブ喫茶」（医学生や薬学生が、健康状態を聞いておすすめハーブティーを「処方」する）や、生命や身体をテーマにした子ども向けのワークショップなどを開催しているほか、近隣のデイケアセンターへのハーブ喫茶の「出前」や、幼稚園でのワークショップなど、福祉施設や教育機関との連携も行われている。2009年12月、原田成（研修医、20代）が芝の家を訪れたことがきっかけとなり、医学生や薬学生が集まり、近隣福祉施設のケアマネージャー、幼稚園教諭、社会保障を専門とする高校教諭など専門性を持つ人とのつながりが広がっている。

「Connecting Neighborhood Project（つながるご近所プロジェクト）」

「Connecting Neighborhood Project（つながるご近所プロジェクト）」は、ヤン・リンドンベルク（デザイナー、ドイツ出身、20代）、中村真梨子（デザイナー、20代）に

よるデザインリサーチプロジェクトである。高齢化に向かう社会において、近所付き合いを支援するソーシャルメディアの新しい形を、住民参加型ワークショップを通じて探る。2010年10月から、週一回芝の家でワークショップを行い、コミュニティマッピングなどの調査を経て、「持ちつ持たれつお互いさま掲示板」、「ご近所新聞」など実験的なソーシャルメディアづくりを実施している。ワークショップには学生や地域のシニア層が参加するほか、島田茂都子（高輪在住、芝の家スタッフ、70代）、狩谷俊介（経済学部4年、芝の家スタッフ、20代）らが中心となって進めている（写真4）。



写真4 「Connecting Neighborhood Project（つながるご近所プロジェクト）」

「芝で子育てしたくなるまちづくりの会」

2010年11月、加藤亮子（元幼稚園教諭、芝の家スタッフ、博物館勤務、30代）と渡辺久美の発案で始まった。子育てのしやすいまちをつくるために、親だけではなく地域に関わる多様な人が子どもとの活動に関心を持ち、参加することを通して互いにつながっていく仕組みづくりを目指すプロジェクトである。学生のほか、下村博史（近隣会社員、社会福祉士、40代）、大野早織（芝三丁目在住、0歳児の母、30代）らが加わり、見学会や勉強会などが行われ、近隣の子育て支援施設の職員なども参加している。

以上、代表的な4点の事例を紹介したが、芝の家ではこの他にも多くの小さい活動が生まれている。図3は、来場者数の変化と各活動の開始時期の比較である。来場者数の増加と時間の経過に伴って、来場者同士の関係性が密になり、活動の幅が広がるという相関関係が想定できる。

地域の居場所からのコミュニティづくり

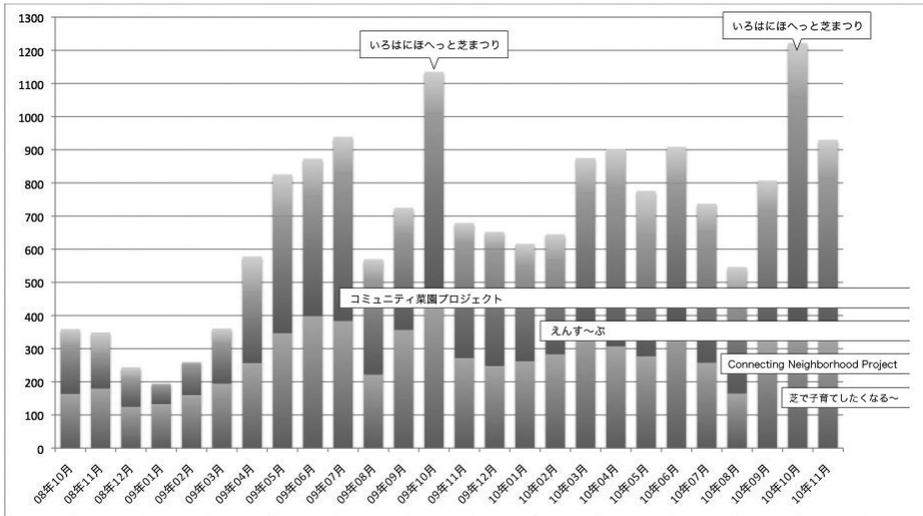


図3 来場者数の変化と各プロジェクトの開始時期

5. 地域の居場所が提供するグループ生成の要因

来場者数の増加がグループによる活動の増加に間接的に繋がっているとしても、単に様々な人が交流しているという状態から必ず自発的なグループが生成されるとは限らない。ならば、それを促している要因とは何だろうか。自発的な活動は、まずは個人の意志が起点になっているが、芝の家の存在が、関心を共有する人々の出会いを容易にし、それぞれの想いを発揮しやすい環境を提供していることは確かだろう。ここでは、「弱い紐帯への開かれ」、「クラスター状に人をつなぐ働き」、「根源的共同性と場の共同性」の3点から考察してみたい。この3点は芝の家が提供するサービスや機能ではないが、芝の家という地域の居場所が持つ特有の性質である。

1) 弱い紐帯への開かれ。前々節でみたように、芝の家は地域内外に開かれている。

そこに集うのは、地縁や血縁にもとづく近い関係の人だけではなく、在勤者や学生、外国人や特定のテーマに関心を持つ様々な人も含まれ、多様な人間関係が準備されている。社会的ネットワーク分析では、家族や伝統的な近隣づきあいなどの親密な関係（強い紐帯）と、それよりも相対的に縁遠い顔見知り程度（弱い紐帯）とを区分し、後者の関係から、より有用な情報をもたらさ

れる可能性が高いとされている（弱い紐帯の強み¹⁴⁾。例えば職を得るための情報は、近親者よりも「弱い紐帯」からもたらされることが多い。近い関係の人同士はすでに似たような価値観や情報を共有しているために、新しい情報は、よりつながりの弱い人間関係から得られやすいということである。地域内だけでは発想できなかった幅広い取り組みが生まれるための要素の一つに、芝の家の弱い紐帯への開かれた構造があるといっておよぶ。

- 2) クラスタ状に人をつなぐ働き。日本では一般的に、強い紐帯への信頼度が高く、初対面の人を信頼しない傾向があるとされる¹⁵⁾。通常は、多様な人との接触機会の増大が、直接的には有効な人間関係の拡大にはつながらないのである。芝の家では、一般の喫茶店などとは異なり、スタッフが居合わせた人同士を紹介したり（図4）、来場者が他の来場者に別の人を紹介したりということが日常的に行われている。それゆえ、来場者は、訪れるごとに顔見知りの人数を増やしていくことになる。このとき重要なのは、単に顔見知りの人数が増えるというだけではなく、「自分の知り合いと知り合いが、知り合いである」という関係が構築されていくことである。人が人間関係に安心感を覚えるのは、知人数の絶対量よりも、図5右のように、三者が互いに知っているというクラスタ状（房状）の関係にあるときだといわれている¹⁶⁾。こうした関係の編み目が密になることで、世代や立場の違う馴染みの薄い人同士にも信頼関係が生まれやすくなり、やがて、そのなかの数名の人々の関心の合致が起こり、関心グループのような形で小さい集合（クラスタ）が形成される。おぼろげながらも関心の中心が形づくられると、さらにそのグループのメンバーに後続の人を紹介しやすくなり、グループは自己生成的に拡大、組織化されていく。こうした小さいグループが複数生まれ、活動を始めているのが、現在の芝の家の状態である。芝の家での小さいグループ生成の二つ目の要因は、来場者の増加と多様性の拡大のほかに、来場者同士の関係性の量を増加させていく（クラスタ状に人を結びつける）働きがあるといえよう。

14) M Granovetter, "The Strength of Weak Ties", American Journal of Sociology, Vol. 78, No. 6, 1973, pp 1360-1380.

15) 山岸俊男『信頼の構造——こころと社会の進化ゲーム』東京大学出版会, 1998年。

16) 増田直紀『私たちはどうつながっているのか——ネットワークの科学を応用する』, 中央公論新社, 2007年, 89-92頁。

地域の居場所からのコミュニティづくり

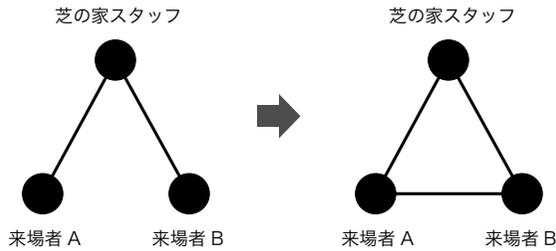


図4 来場者同士を知っているスタッフが両者を紹介し、結びつける。

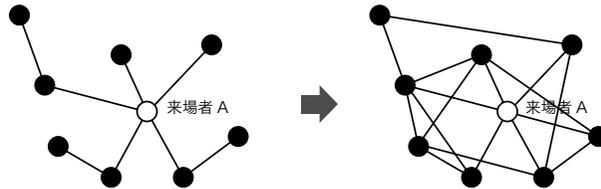


図5 放射状の人間関係（左）よりも、クラスター状の関係（右）の方が安心感を感じられる。

3) 根源的共同性と場の共同性。上に述べたようなグループは、相互の利益を追求するビジネスパートナーのような関係にもあてはまるだろう。芝の家の事例がそれと異なるのは、私的利益を目指すのではなく、地域の公益性を志向した活動が自然に生じているという点である。こうした志向は、芝の家における人間関係の規範が関係していると考えられるのだが、田中重好による共同性の4つの階層構造からこれを考えてみたい。4つの階層構造とは、すなわち、人間同士の本質的な共感性に基づく根源的共同性、地域をともにしているという潜在的な場の共同性、ひとつの共同体に属しているという認識を共有している自覚的共同性、ある目的をともにする目的的共同性である¹⁷⁾。注目すべきは、目的的共同性は、前者から後者への段階的に進展した最終形として成立するという点である（図6）。しかしながら田中は、地域的公共性を形成するための今後の課題として、「公共性なき私性」の克服を挙げている¹⁸⁾。この観点から芝の家でのグループ生成をみると、芝の家はまず、目的、能力、知識の有無を問わず、どんな人もいたいように過ごせる場である。そこでは、競争的な関係ではなく

17) 田中重好『地域から生まれる公共性—公共性と共同性の交点—』ミネルヴァ書房、2010年、64-71頁。

18) 田中、前掲書、263-265頁。

互いを尊重し合うという規範が定着している。つまり、芝の家での出会いは、前提として人間同士の根源的な共同性に基づくのであり、芝の家という場を共有しているという潜在的な共同性をも分かち合っている。自覚され目的を持つ共同性の段階へゆるやかに発展するなかにも、そうした規範が持ち越され、それが私的利益の追求ではない公益的な活動へと自然につながっていると考えられる。芝の家の「誰もがいたいようにいられる」という場の規範は、一見、目的志向的な活動にはそぐわないように見えるが、しかし、活発な活動が「公共性なき私性」に陥らないための基盤を確保する一因になっていると考えられるのである。

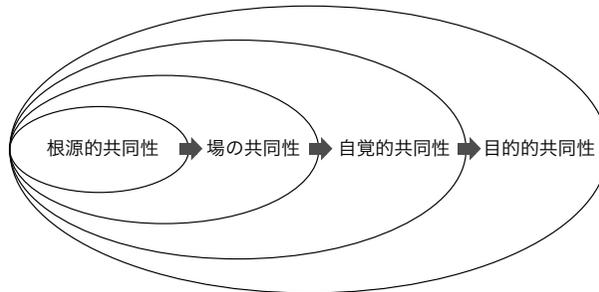


図6 4段階の共同性の構造

田中重好『地域から生まれる公共性—公共性と共同性の交点—』より引用。

6. 展望と課題

本論はここまで、芝の家での「中間的」で「小さい」グループの生成過程に注目し、芝の家の持つ「弱い紐帯への開かれ」、「クラスター状に人をつなぐ働き」、「根源的共同性と場の共同性」という性質が、自発的な地域活動の生成に寄与する過程を論じてきた。こうした小さなグループの活動が網の目のように広がることは、ソーシャル・キャピタルの蓄積としての地域コミュニティの力の向上につながるだろう。また、そのうちのいくつかは「種」となって、やがてNPOや新たな地域協働体などへ発展していく可能性が高い。その萌芽的段階を支援する培養器としての役割が、地域の居場所に求められているとあって構わないだろう。

本論で提示した自発的なグループ生成の要因は、あくまで芝の家の事例にもとづく一考察であり、地域の居場所全般に適用できる十分条件とはいえない。また、こうした活動が始まるための前提にどの程度の来場者数や多様性、人間関係の量（ネットワーク量）が必要なのか、どの程度の範囲の地域への波及効果が見込まれるのかといった量的な検証は今後の課題である。今後は、地域の居場所とコミュニティ形成の過程をより精緻に分析するため、インタビューやアンケートによる来場者の主観的な経験や人間関係の変化などについても調査を行い、また、全国の同様の取り組みについても事例調査を進め、コミュニティにおける地域の居場所の役割をさらに探ってきたい。

参考文献

- Fischer, Claude S. "To Dwell Among Friends: Personal Networks in Town and City", The University of Chicago Press, 1982.
- Granovetter, M. "The Strength of Weak Ties", American Journal of Sociology, Vol. 78, No. 6, 1973, pp 1360-1380.
- 服部正「地域コミュニティの核としての公民館」, 『月刊社会教育』54 (10), 60-65, 2010-10, 国土社。
- 広井良典, 小林正弥編『双書 持続可能な福祉社会へ：公共性の視座から 第1巻 コミュニティ 公共性・モモンズ・コミュニティアリズム』, 勁草書房, 2010年。
- 広井良典『コミュニティを問いなおす——つながり・都市・日本社会の未来』, 筑摩書房, 2009年。
- 久田邦明『生涯学習論——大人のための教育入門』, 現代書館, 2010年。
- 北海道「平成17年度アカデミー政策研究 ソーシャルキャピタルの醸成と地域力の向上——信頼の絆で支える北海道——」, 北海道知事政策部, 2006年, <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/sum/academy/7academy/sc/mokuji.htm> (閲覧日: 2010年12月17日)。
- Jacobs, J. "The Death and Life of Great American Cities", Random House, 1961.
- 国立社会保障・人口問題研究所『日本の将来推計人口 (平成18年12月推計)』, <http://www.ipss.go.jp/pp-newest/j/newest03/syousai03.asp> (閲覧日: 2010年12月10日)。
- 増田直紀『私たちはどうつながっているのか——ネットワークの科学を応用する』, 中央公論新社, 2007年。
- 松本康「現代都市の変容とコミュニティ・ネットワーク」, 松本康編『増殖するネットワーク』, 勁草書房, 1995年。
- 望月照彦『マチノロジー——街の文化学』創世記, 1977年。
- 内閣府「コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書」, 内閣府経

- 済社会総合研究所, 2005年, <http://www.esri.go.jp/jp/archive/hou/hou020/hou015.html> (閲覧日: 2010年12月10日)
- 内閣府「平成14年度 内閣府委託調査 ソーシャル・キャピタル: 豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」内閣府国民生活局市民活動促進課, 2002年, https://www.npo-homepage.go.jp/data/report9_1.html (閲覧日: 2010年12月10日)
- 内閣府『平成22年版高齢社会白書』, 2010年, <http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2010/zenbun/22index.html> (閲覧日: 2010年11月5日)
- 中島正博「地域コミュニティの再興に関する考察: 日本におけるソーシャルキャピタルを巡る議論を基にして」, 『広島国際研究』巻15, 89~101頁, 2009年。
- 中西英臣「都市における地域コミュニティ調査研究——活力あるミッション型コミュニティの形成に向けて」, 『調査研究期報』(151), 4-11, 2010-09, 都市再生機構都市住宅技術研究所
- 恩田守雄『互助社会論——ユイ, モヤイ, テツダイの民俗社会学』, 世界思想社, 2006年。
- 恩田守雄『共助の地域づくり—『公共社会学』の視点—』学文社, 2008年。
- Putnam, R.D., Leonardi, Robert, Nanetti, Raffaella Y. “Making democracy work : civic traditions in modern Italy”, Princeton University Press, 1993.
- Putnam, R.D. “Bowling alone : the collapse and revival of American community”, Simon & Schuster Paperbacks, 2000.
- 田中重好『共同性の地域社会学』ハーベスト社, 2007年
- 田中重好『地域から生まれる公共性—公共性と共同性の交点—』ミネルヴァ書房, 2010年。
- 東京ボランティア・市民活動センター『「市民が市民を支える」～地域の協働空間を生かした実践～』, 東京ボランティア・市民活動センター, 2002年。
- 上野千鶴子「選べる縁, 選べない縁」, 栗田靖之編『現代日本における伝統と変容3 日本人の人間関係』, ドメス出版, 1987年。
- 山岸俊男『信頼の構造——こころと社会の進化ゲーム』東京大学出版会, 1998年。
- 山崎丈夫『地域コミュニティ論——地域分権への協働の構図』, 自治体研究社, 2009年。
- 吉原直樹『都市とモダニティの理論』, 東京大学出版会, 2002年。